

知力脚力金力魅力

澁谷 繁樹



京都の知の山脈から、また、峰が一つ消えた。鶴見俊輔さん、知力と脚力を併せ持つ京都型知識人だった。卒寿を超えての往生だから涙は滲まなかったものの、もう一度、杯を交わしたかったな、京都のどつか、ろうたけた一重瞼のオカミのいるごちんまりとした酒亭で。

どこで待ち合わせても特注のアメチヤン大型車を転がしてくる中国人男性留学生がいる。

折り紙付きの頭脳に、大馬力の車でさらに磨きをかけた脚力。金力にも恵まれているんだね、君は、と羨望を投げかけたら、イエイ

エ、両親は二人とも退役公務員で年金暮らし、決して金持ちではありません、と笑う。

留学には金がある。本人は笑いにまぶすけれども、交流網を活用して、ガイド、翻訳、投資と、金がる木を、何本か持っているらしい。留学先を鹿児島に決めたのも、網の一つ、インターネットで日本各地を検索、カゴシマは自然にあふれた街と当たりをつけたという。二十代、中国では当然、一人っ子になる。生まれたときから、家には、パソコンがあつたのだろう。

世界にさきがけた電化日本との私的幻想は、三十年前に、アメリカで何歩も先を行く電算機を見て、あっさり破れた。韓国では、掌におさまる携帯電話に驚いたし、一九八八年のソウル五輪では、原稿に鉛筆なんてウチくらい、電子機器の完備した記者席で恥ずかしくて、と地方新聞の派遣記者が嘆いている。

中国でも、歓迎の宴席で酔いに任せて、カ
ンノウイロヲオモンジテと長恨歌の冒頭を口
走ったら、宴を主催した若い大富豪が、スマ
ートフォンを取り出してチャツチャツと検索
おう、我が国の大詩人の傑作をそらんじてお
られるとは、だから、日本の知識人は油断で
きません、とお世辞に包まれ、知識人のはし
くれだかなんだかは存じませんが、スマート
フォンなる機器は使った経験がございません
で、とへりくだってしまった。

中国人留学生は、鹿児島にとどまっている
つもりはない。アメリカの大学に留学して、
知力をさらに強靱化する計画を立てている。
今年の秋にもサラバ鹿児島だったのが、父が
病気で倒れ、入院やらなにやら、壮図は一時
停止を余儀なくされた。

一人っ子政策は、何かの際、頼れる兄弟が
いない、一人で奮闘しなければならぬ。な

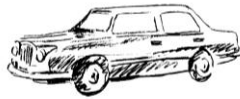
るだけ最高の医療となると、北京で、となる。
コネもカネも駆使して入院させた病院は、一
泊で二十万円かかる。起き上がれない父は、
中国版新幹線・高鉄で北京まで運んだ。切符
代もかなりの額になる。

古今亭志ん朝の落語に、親不孝者を皮肉る
場面がある。「オヤジの吊いの晩に香典もつて
ジョウロヤに行くヤロウなんざ」。行こうにも
ジョウロヤがなくてかろうじて同種の不幸は
避けているものの、通夜でも葬儀でも酔っぱ
らっていた身としては、自分が中国人留学生
の立場に置かれた場合、とても同じ奮励努力
ができるとは思えなくて、舌を巻くしかなく
なる。

失脚した中国高官の息子は、全裸の女子学
生を乗せたイタリアスーパーカーで天国まで
飛んで行った。似たような連中ばかりだと思
わない方がいい。知も脚も金も備えて中国の

次の時代を担うのは間違いない魅力的な人材が、いくらでも育っている。中国人留学生は、愛車もアメリカまで持つていく。海路と陸路。さても長き旅路よ、いくら、かかるのかねえ。

(鹿児島県N I E 〓教育に新聞を〓推進協議会事務局長)



清色城の空堀 (2015年2月撮影)

清色城(きよしきじょう)は鹿児島県薩摩川内市入来町浦之名にある中世山城で、国の史跡。曲輪の間にシラス台地を切り取った断崖絶壁の空堀が設けられています。